インタビュー：

国際的視点から日本の風景をとらえる

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
西村幸夫 教授

地方のまちづくりを支援される一方、日本イコモス国内委員会委員長として世界遺産登録の審査もされている西村幸夫先生に、国際的な視点から見る日本の風景の魅力やこれからのまちづくりのポイントを語っていただきました。
〈本文中は敬称略〉

日本の風景の変遷

――伝統的な日本の風景の特徴について、お聞かせください。

西村　日本は、アンジュレーションに富み、山や谷や海に「囲まれた空間」が多いという地形的な特徴があります。遠くの地平線が見える広い空間ではなく、何層にも連なった山々に囲まれた空間が多く、今も地方都市に行くとそういった風景が残っています。そしてその地域に住む人々は、里山に対し強いアタッチメントを持っています。例えば「手前の山は生活の山」「奥の山は聖なる山」など、その地域に固有の文化を育んでいます。日本の風景は、風景だけでなく「囲まれた空間」からなる文化が大きな特徴と言えるでしょう。

――一方で、伝統的な日本の風景は近現代で大きく変化したと思います。この変化の背景は何だったのでしょうか。

西村　明治維新もありますが、やはり戦争が大きなキーワードでしょう。日本は100都市以上が戦災にあったため、歴史的な建造物は壊され、近代は似たような建造物が建てられてきました。たとえば、住宅は商品として扱われるようになったので、昔の庄屋のように百年持つ家ではなく、建物の更新サイクルが短く似たような家を売るようになりました。また、駅前は降りたらどこも看板がたくさんあり、少し高い建物がある、といった似たような風景になってしまいました。
似たような風景が広がった背景には、もう一つ、都市と農村の「境目」がなかったことも挙げられると思います。都市に城壁がなかったことから、昔から都市は広がったり縮んだりを繰り返していたため、日本人は都市の変化に寛容と考えられます。
そして、戦後の高度経済成長期に、農村が潰されて郊外型の都市が広がってきたことも、特に意識なく受け入れてきました。

――伝統的な日本の風景を保護する上で、ネックになっていることはありますか。

西村　高度経済成長期は、都市化によって生じる交通渋滞などの課題にアプローチする「課題解決型」で都市計画が進められました。右肩上がりの社会ですので様々な課題が生じますが、全体的で公平な制度が導入されました。一方で、歴史的な景観・まちの保護は、京都などの特別な都市だけのこととして「別格扱い」されていました。
現代の成熟社会はもう右肩上がりではないので、ストックを大事にする、個性を発揮するということが見直されてきています。社会の流れや感覚が変わってきているように感じます。特に、最近の若い人は成熟社会で育っているため、古いものがむしろ新鮮で、良いものは良い、といった見方が素直に純粋にできる人が多いですね。こういった感覚は、景観を保護する上でとても大事だと思います。
一方で、都市計画などの制度が変わるのにはまだ時間がかかります。個性を伸ばすことは、公平性を重視する行政の考え方と合わないからですが、地方創生の流れで地方独自の戦略が求められるようになってきていると思います。

Interview: Yukio Nishimura

聞き手：
みずほ総合研究所
久嶋万祐子
清 衣里奈
（ともに広報部会員）

――【事例①村上】西村先生が委員長（村上市歴史的風致維持向上協議会）を務められた、村上（新潟県村上市）の事例をご紹介いただけますでしょうか。

西村　村上は城下町で町屋が並ぶ歴史的な道があるのですが、昔から道路拡幅計画があり、賛成派と反対派が非常に激しく対立しました。右肩上がりの社会であれば何とか対応しなければならないということでしょうが、これから人口や交通量が減少する中で、本当に工事が必要なのかということが焦点でした。結果的には、途中まで道路拡幅工事が進んでいましたが、その先まで拡幅するほどの交通量がないのだから今その歴史的な道を壊して魅力を消してしまうのではなく、残すことでまちの個性を活かそうことになりました。地域の強みを大事にするカルチャーに変えていかなければならない、ということが明確にされた事例と言えます。細かく見ると、冬場に歩道が確保できないといった課題などがありますので、細かな改善が必要です。これまでの制度では、公平性が求められるため例外を認めず、道路拡幅ありきで議論されてきたのでしょう。これからは、個別の課題に細かくアプローチすることが必要だと思います。

――【事例②鞆の浦】映画「崖の上のポニョ」のモデルといわれる鞆の浦（広島県福山市）の架橋問題について、日本イコモスから提言を出されていましたね。

西村　鞆の浦は、村上と違い道が狭くて困っている人がいて、バイパスが必要な状況でした。日本イコモスからは、鞆の浦を埋立て架橋して港の魅力を捨てるのではなく、山側にバイパストンネルをつくる代替案を提言しました。トンネル工事は大変で問題もない訳ではないのですが、その方が工期も短く安くできますので、総合的にみると都市の個性である港の魅力を捨てる前に代替案を考えるべきではないかと。また、バイパスもすぐできるわけではないので、既存の道にちょっとしたこと、たとえば信号を設置するとか小さな空地を車のすれ違い時のスペースとして活用するとか、現状を改善する工夫をセットで考えなければならないということも申し上げました。これまでは、埋立て架橋バイパスでないと利便性は改善されないとして、ほかに選択肢が示されていませんでした。利便性の改善だけでなく、鞆の浦の個性である景観を守ることに関心が高まってきたことが、今回の議論を深めた背景だと思います。

――2つの事例をお聞きすると、日本社会の成熟により「風景」の位置付けが変わってきていると感じます。

西村　例えば、鞆の浦には、この5年ほどで新しいお店がいくつかできました。今まであまり考えられませんでしたが、田舎で新しいビジネス

事例①村上（写真：村上市観光協会）

事例②鞆の浦（写真：福山観光コンベンション協会）

西村先生(右)のお話に惹き込まれる久嶋(左)、清(中)両部会員

をする若い人たちが増えてきています。この傾向は、昔からの風景や建物が自分の生活に馴染む感覚、つまり町屋暮らしや近所づきあいを面白い、そういった環境で子供を育てたいといった感覚を持つ人が増えていることによると思います。これまでは匿名性の高い都会が好まれる傾向にありましたが、匿名性が高いということは安心もできないという側面もあるのです。昔ながらの風景とそこにあるコミュニティの中で、自分のライフスタイルを表現していくことが一つの価値観となってきたと言えるのではないでしょうか。
インターネット環境により、どこでもビジネスができる環境になりつつあります。また、交通アクセスや車の技術も発達していますので、田舎も居住の選択肢になる、むしろその選択が一般的になることも考えられます。但し、このような現代的価値観から見ても、田舎ならどこでもよいというわけではありません。魅力的な風景などの地域の個性がなければ人は集まりませんので、個性を発信し「選ばれる田舎」になることが必要だと思います。

国際的な視点から見た日本の風景

――アジア諸国と比較して、日本の風景はどのような特徴がありますか。
西村　アジア諸国と比較したときの日本の特徴は、都会と同レベルの生活水準を享受することができる便利な田舎が残っていることだと思います。他のアジア諸国でも田舎は残っていますが、インフラが整備されていないので住みづらく、都市と地方に大きな格差があります。日本には、住む場所としての選択肢となる田舎がきちんと残っており、それが日本の魅力でもあり、大事にしなければいけないと思います。この背景には、これまでの政治において農村にそれなりの投資を行ってきたこともあると思います。

――ヨーロッパとの比較では、どのような特徴があると言えるでしょうか。
西村　日本は人口密度が高く、都市化が急速に行われてきました。一方で、ヨーロッパの社会は昔から安定・成熟しているという違いがあり、一概には比較できません。ただ、日本の社会も成熟してきているので、ヨーロッパのまちに近づいていくのではないかと思います。ヨーロッパの特徴として言えるのは、自分たちのまちに自信をもっていて、自分の地域の個性を自信をもって発信していくことができていることです。ですから田舎も元気ですね。農業がビジネスとして確立されていることも影響しているのだと思います。その点では、日本でも農業を競争力のあるビジネスとしてやれると、変わってくるのではないでしょうか。

――ツーリズムの観点から日本の風景を見ると、どのような魅力があると思われますか。
西村　日本に来る観光客にはさまざまな人がいますので、何を面白いと思うのかは人それぞれです。渋谷のスクランブル交差点をスペクタクルなものとして魅力に思う人もいるし、歴史的なまちが好きな人もいます。また、例えばパチンコ店と神社が隣り合っていることがあるように、多様なものが混在している状態に違和感がないことが面白いと思う人もいれば、日本の安定した社会から生まれる安心感に魅力を感じる人もいます。田舎にとって大事なのは、どんな人に来てほしいか、そのための自分たちのまちのアピールポイントを明確にし、自信をもって売り出していくことだと思います。

――西村先生は世界遺産審査にも携わられていますが、世界遺産審査とまちづくりは少し毛色が違うものに感じます。
西村　世界遺産は、これまでは誰が見てもその価値がわかるモノが登録されていましたが、近年では、世界遺産でもストーリー性を重視するようになってきています。これはまちづくりで自分がずっとやってきたことですが、ようやく認められるようになってきたんだという実感があります。世界遺産では、世界から見て意味のあるストーリーを不動産・建物・土地の「モノ」として語る必要があります。例えばその国で一番古い建物であったとしても、ストーリー性が欠けていれば世界的に魅力のあるものとして見なされないこともあります。その国で一番古い建物は、どの国にも存在しますからね。一方で、まちづくりでは世界と競争する必要はありません。頂点を目指すのではなく、それぞれの地域の個性を活かすことが重要です。私自身としては、地域で頑張っている人を応援することが自分の役割だと思っていますが、世界遺産という大きな目線が小さなまちづくりにも活きると思って取り組んでいます。

世界に紹介したい日本の風景

――西村先生が世界に紹介したいと思う日本の風景とは、どのようなものがありますか。
西村　実際に外国からのお客様を案内することもありますが、散居村の風景はぜひ紹介したいと思います。例えば北陸・砺波の防風林など、開発があまり進んでおらず生活の風景が見えるところは素晴らしいと思います。風景を見ながら日本人として誇らしいと思える貴重な場所ですし、日本にはそういった風景がまだ所々に残されています。地元愛が強い地域性が表れているのかもしれません。こういうところを大事にするために、がんばって働こうと思えますね。

散居村(写真：南砺市観光協会)

――では最後に、都市化の中で光る風景をご紹介いただけますでしょうか。
西村　東京については、東京駅がその個性を象徴していると思います。大都会の都心にあれほど大きな駅が存在し、かつ皇居と前の空間が計画的に整備できているのはすごいことだと思います。大阪や名古屋などの他の都市の駅は、都市のエッジに位置していることが一般的ですが、東京駅は都心にあり、かつ新幹線が開通して路線が大幅に拡大しても、100年間ずっと同じ場所に位置し続けることができています。100年にわたって同じ駅舎が使われ続けたという点も、他に例を見ない点です。これは都市計画のおかげであり、最初にとんでもなく大きい駅を作り、日本橋側のヤードを十分に確保することができたから、可能になったのです。そういう意味で、皇居側から見た東京駅の風景は、東京を象徴する都市化の中で光る風景だと思います。都市計画分野と交通分野が織り成した風景とも言えますね。

西村先生のお話にもあったJR東京駅の丸の内駅前広場整備について、次号の会員企業百景でお伝えします。

東京駅

皇居までの道

Interview: Yukio Nishimura